

南方（その他）

アンダマン、ニコバル、

レンパン島の戦歴

茨城県 高橋 嘉久郎

戦後五十余年を経過した今日、皆さんから「戦地では随分苦労したでしょうね」と言われますが、実は当時のことはあまり思い出したくないのです。戦争に行かれた方々は、おそらく同じ思いでしょう。しかし、あえて体験談をお話するのは、戦争体験者として後世に語り継ぐ責任を感じたからです。

昭和十七年十月、現役兵として近衛歩兵第三連隊（東部第六部隊）に入営しました。検閲までの一期間

は、代々木練兵場と戸山射撃場に通い、厳しい訓練を受けました。半年間の教育を終了し、一等兵に進級した途端に南方行きの命令が下り、一泊外泊の許可を得て、両親弟妹と一夜を共にし、互いに銃後と戦地で頑張ろうと誓い合いました。当時は、軍の機密に触れることは一切口にするには出来なかったもので、家族には戦地に行くことになったとのみ告げ別れたのです。

昭和十八年四月二十二日「棠洋丸」という九九〇〇トンの大型輸送船に乗って宇品を出港しましたが、船倉内は蒸し暑く、しかも兵隊達はすし詰め状態で身動きもできません。そのうえに敵の魚雷攻撃を避けるため灯火管制がしかれ、迂回航路を余儀なくされました。そのため、スマトラ島のペラワン港に到着したのは五月十六日でした。実に二十五日間かかったので

す。

上陸後聞いた話ですが、後統輸送船が台湾沖で魚雷攻撃を受けて沈没、全員戦死したということでした。

我々が本隊と合流したのは、上陸地点から更に山地に入ったカバンジャへという駐屯地でした。大隊長は野沢統司陸軍少佐です。本隊の面々はシンガポール作戦で銀輪部隊として名を馳せた勇士であったと聞き、自然と頭が下がる思いでした。我々初年兵は、そこでもまた四カ月の厳しい戦闘訓練をやらされました。

昭和十八年九月、南西第一守備隊に転属命令をうけて、印度洋のアンダマン島（ベンガル湾の南の列島）に転戦しました。当時は、既に山本連合艦隊司令長官が壮烈な戦死をとげ、連合軍のガダルカナル進攻があり、空陸海ともに一段と厳しい情勢となっていました。海軍より特別仕立ての二等巡洋艦「球磨」（五一〇〇トン）に乗り、無事アンダマン島のポートブレアに入港できました。

その時、私は初めて予想もなかったアクシデントを目撃しました。完全武装で我々を迎えに来た舟艇に

乗り込む時、誤って吊り梯子から海中に転落した上等兵がいました。「アッ」と叫んだが、どうすることもできません。本人も完全武装だったので浮き上がることも到底できるわけがありません。この古参兵の名前は今でも忘れることはできません。妻子のいたことを思うと、本当に気の毒なことだったと未だに脳裏に焼き付いています。

我々の上陸したポートブレアは港町で、アンダマン諸島では唯一の良港であり、戦前は英国の支配地でした。赤煉瓦造りで三階建ての東洋一といわれる刑務所があり、五〇〇〇人収容可能であった由、インドやビルマからの流刑者が多かったそうですが、我が陸戦隊に占領された後、彼等は全員釈放されたらしいのです。

すっかり平安を取り戻したこの町には陸海軍の司令部が置かれ、その存在感も強く、飛行場も二カ所に設置されて、ゼロ戦等の名機も多数存在していたように記憶しています。我々守備隊の駐屯地は、ここから更に二十キロ離れた名もない密林地帯で、原住民が造っ

たと思われる原始的なアバラ小屋が兵舎でした。雨漏りのするこの小屋を修理するために、檳榔樹びんろうじゅや椰子を切り倒すのです。檳榔樹は二つ割りにして床に敷き、椰子の葉は何枚も重ねて屋根を葺くのです。

また身を守るため、空襲と艦砲射撃に備え塹壕を掘りました。更に敵兵上陸に対して海岸線に速射砲と重機関銃の陣地を構築しました。造成には土囊と樹木は欠かせません。そのため、毎日が大変な重労働の連続でした。

我々の最も警戒したのはスパイの潜入でした。小型舟艇に乗って潜入してくるスパイに、陣地の所在を知られたら大変なことになります。スパイ侵入に備え海岸線を警備するのも重要な日課のひとつでした。ある日、スパイ潜入の足跡を偵察するため、一個分隊で海岸線を調査しました。海岸線はマングローブの密林を踏破しなければなりません。誤って幹から踏み外したら海面に落ち一コロです。幸い私は、そのような羽目に遭いませんでしたが、他部隊の戦友が行方不明になりました。

インド洋に位置するアンダマン島は半年が雨期です。この季節になると吸血虫の野蛭とマラリア蚊が繁殖し、ゲートルから軍靴の中にまで入り込み血を吸うのです。行軍中であれ、兵舎内であれ、時と所構わず吸い付き、戦友の中にはその傷口からばい菌が入り、熱帯性潰瘍となり歩行困難で入院した者が多く出ました。実は私もマラリア熱に冒され寝込んだことがありますが、四十度以上の高熱が続き、三日三晩うなされます。また、栄養失調や赤痢、 Dengue 熱などの悪疫が蔓延し多数の戦友が病死しました。

私が復員したとき、弟妹たちから「兄さん、戦地に行って随分太ったね」と笑われましたが、実は栄養失調でむくんでいたのです。復員してからも、食糧難のため家族と共に山菜を採りに行ったら、突然高熱が出て何とも言えぬ嫌悪感に駆られた思い出があります。これは、軍隊土産のマラリア熱の再発でした。その時は、キニーネというマラリア特効薬を服用して当座をしのぎました。

昭和十八年から十九年にかけて顕著になったのは物

資不足でした。食事は外米と乾燥野菜だけ、調味料は岩塩と乾燥した粉末味噌で、砂糖・食用油は完全に姿を消してしまいました。一番辛かったのは生野菜が食べられなかったことです。

待ちかねていた貨物船がポートブレア港に着くという報を受け、喜び勇んで荷揚げ作業に行ったのですが、入港を待っていた我々の目の前で、食料を満載していた貨物船は大音響と共に、船体が真っ二つに折れ沈没してしまつたのです。敵の時限爆弾か魚雷攻撃によるものと推察されましたが、もちろん乗組員の生死など不明です。我々一同は愕然として、その場を立ち去ることができませんでした。

この頃、私の父が胃潰瘍のため四十九歳で亡くなつてしまいました。昭和十九年三月のことでした。その報が軍事郵便で届いたのは五カ月遅れの八月末でした。親孝行も出来なかつた無念の思いで、三日三晩、兵舎の中で泣きました。班長も私の女々しい行動を黙認し、親子の情に理解を示してくれました。

戦況の不利を察知したのもその頃でした。常に十機

以上の戦闘機がいた飛行場には、その姿が見えなくなつたことと、逆に敵の偵察機が高度を下げて飛来するのを見て、不利な戦況を肌で感じたのです。

サイパン島全員玉砕、グアム守備隊全滅の報も入ってきました。しかし、我々はいかに戦況が悪化しようが、我に戦艦「大和」と「武蔵」ありと信じていました。きっと起死回生の大作戦をしてくれるものと期待し、確信をしていました。我々はいつ、どこでも国のために身を捧げ、殉ずる覚悟を持ち続け、気概はますます旺盛でした。

昭和十九年九月、今度はニコバル島の独立歩兵第三五一大隊に転属になりました。数隻の輸送船でポートブレア港を出帆。途中、敵の魚雷攻撃を受けることもなく、難なく目的地に到着することが出来ました。

この島はアンダマン島よりずっと小さく、珊瑚礁で出来た土地でした。土地は石灰質で色は白色化しています。従って草木はあっても、アンダマンのような密林地帯はなく、環境はアンダマンより良好と読みましたが、悪疫、悪病は発生し、同じように蔓延しまし

た。

一番閉口したのは、敵が艦砲射撃すれば、弾丸は反対側に突き抜けるほどの小さな島であったことです。敵が上陸作戦を敢行してくれば簡単に成功しそうな小さな島にも見えませんでした。だから我々は、玉砕を覚悟の上で陣地構築と水際作戦の訓練を続けたのです。余暇のある時は肉弾戦に備えて銃剣術の練習などが暫くの間続きました。

また、自給自足のため、さつまいもとタピオカの栽培に取り掛かりました。この頃、島には椰子の木があって、演習帰りには椰子の実を取って甘い汁を飲み、実をえぐって食べたものです。また、椰子の新木の芯は内地の竹の子のようなもので、とても美味しく貴重なものでした。しかし、軍は長期戦を視野に入れてか、新木の伐採禁止の命令を出しました。以降、椰子の芯を口にするとはなくなりました。

陣地構築と演習、更に自給自足のための畑を耕している間、何故か敵機の飛来も少なくなり、艦砲の威嚇射撃も少なくなりました。

ある日、八月の十五日でしたか大隊本部より全員集合の命令が出ました。服装は単独の服装でよいというのです。過去のいかなる集合でも、歩兵は小銃を片時も離すことはありませんでしたが、今回の集合は異様な感じがしました。

大隊長の訓示内容ははっきりしませんでした。天皇陛下の玉音放送録音で終戦を知りました。部隊全員がこの時の心境は複雑な気持ちでいっぱいだったに違いありません。私自身の気持ちは、我々の南方軍にはまだ戦闘能力があり、武器も弾薬もあるのになぜ終戦なのかを疑いました。副官からの伝達で「一週間以内に我々を武装解除するから、兵器、弾薬は一カ所に集結しておく」とのこと。

武装解除に来たのはイギリス軍、といってもインド兵でした。隊長は陸軍少佐の肩章を着けていましたが、さすがにイギリスは紳士の国だけあって、勝利したにもかかわらず、威嚇したり、恐怖感を与える行動はとりませんでした。だから、武装解除も平穩裡に終了しました。

今思えば、原住民の反乱がなかったのはせめてもの救いでした。しかしこの終戦で将来の行動パターンが目に見えず、内地に帰還するといっても時期は全く不明のままでした。仮に日本に帰ったとしても、その先は読めません。希望も失い、悩みに悩んだ末、死んでいくものもありました。

一つは某陸軍少尉の拳銃自殺、二つは生真面目で銃剣術のめっぽう強かった某陸軍軍曹の発狂と服毒自殺、三つ日には温厚な陸軍伍長の投身自殺などです。

これらの一連の事実は、単なる悲しい出来事として片付けること無く、戦争体験者の張りつめた気持ちから終戦という負の生活に転じたときに発生した事件であることに注目していただきたいのです。

私の軍歴はそれだけでは終わりませんでした。さらにマレー半島のレンパン島での捕虜生活が待っていました。

そのレンパン島は、第一次世界大戦で捕虜となったドイツ兵全員が餓死したいわくつきの不毛の地であったのです。周辺諸島からも多数の日本兵が送り込まれ

ると聞いて一層の不安が募ってきました。このような小さな小島に多数集結すれば食糧難に一段と拍車がかかり、ドイツ兵と同じ運命になるという懸念からくる不安でした。文字通り食糧が無い、船舶も無い、そして不毛の地とあっては死を選ぶより方法が無いと。

戦後、この島で捕虜生活をした人は、誰言うとなく「恋飯島」と言ったと聞きました。それは「ガダルカナル島」を「餓島」、ボーゲンビル島を「墓(ボ)島」と言ったように、自らの体験を、そのように言ったのでしょう。

そのような、いらだった気持ちを持ちながら、我々は道路建設と宿舍造営に汗を流す日々を暫く続けたのです。内地の土地を踏む日はいつかなんて、到底考える暇などありません。ひたすら、生き永らえることが精いっぱいだったのです。

ある日、農家出身の古参兵達から提案がありました。「少しでも生き延びるためには自活、農耕が是非必要だ」と言うのです。まず不毛の元凶である粘土質の土を焼き砕くことにより必要なリン酸、カリウムを

生み出し、枯れ葉、落ち葉を集め畑に埋めることにより腐葉土に転化させる……というのでした。

種、苗等の確保と耕作方法などについて、試行錯誤を繰り返しつつ、ついに農作物の栽培に成功したのでした。

品種はサツマ芋、タビオカ、砂糖きび等々でした。しかし農耕面積に限度があり、何千人もの兵士達の口もとに届くまでにはいきませんでした。

その頃、米軍から「レーション」と呼ばれた食料が継続的に支給されたのは、本当に幸福なことでした。

「レーション」は、米軍がジャングル戦に備えて考案した弁当です。飛行機から投下しても崩れません。中は、チーズ、バター、ビスケット、更にはコンビーフの缶詰とタバコまでバックされています。我々はこの栄養価に富んだ美味しい食料を口にして延命出来たと思っています。

今でも思うのですが、戦時中、敵性国家として憎み戦った米軍から、終戦後とはいえ、国内では食糧、衣類等の放出物質を受け、果ては捕虜の一兵卒に至るま

で食糧支援がなされたことを考えると、何故か不思議な運命に気付くのです。同時に民主主義を完成させた米国の腹の大きに深く敬意を表すのは私一人ではないでしょう。

総じて私の軍隊生活は、離島の守備期間が多かったので、敵が上陸してこない以上戦闘を交える機会がありませんでした。もし上陸してきたら、最後まで戦って敵と刺し違えながら玉碎しなければなりませんでした。

しかし、幸いにして敵と刃を交わせたり、相互に撃ち合うことはありませんでした。だから死を覚悟して家を出て、戦地に赴いた私は人を殺したことがありません。その限りにおいては戦争体験者としての資格がないかもしれません。しかし、私は身体の不自由、苦痛度はいわゆる戦争体験者と同様の辛酸をなめて国のために戦ったと思っています。

青春を 国に捧げし 代償に

賜いし銀杯 戸棚に眠る